

## 村おこし子ども団

### 宇検村役場 保健福祉課 地域おこし協力隊

#### 栄 雄大

「子どもからお年寄りまで住みやすい村を作るには、どうしたら良いのだろうか？」

私は鹿児島県奄美大島の田舎村に生まれた。今年、27 歳になった。同級生は 15 人いたが、現在、村に残っているのは私一人だ。私が幼い頃に比べ少子高齢化の影響もあり、随分と活気のない村になってしまった。

「私の住む村はどこかの時点で道を間違えたのだろうか？」

「あの時にこうしておけば良かったのではないか？」

しばしば、このような考えが浮かんではいたが、何をすればいいのか分からず考えるのを先延ばしにしていた。いつまでもこのままではいけないと感じている。

そこで、昔のことを嘆くのではなく、私が小さい頃の経験を元に何ができるかを考えてみることにした。私が小さい頃に村で感じていたのは、選択肢の少なさだ。

学校の勉強と限られたスポーツ以外に選択肢はない。その頃の私はテレビで見た青年海外協力隊の活動に興味があり、自分の意思で人の役に立つ活動が行う姿に憧れがあった。そこで、自分たちで企画から考えて人の役に立つボランティア活動がしたかったのだが、その選択肢は村には用意されていなかった。

あの時に自分の考えを主張していたら、子どもなりのボランティア活動を実現することができていたかもしれない。だが、新しいことを始める勇気がなかった当時の私は、村の中に用意された選択から選ぶことしかできなかった。

では、あの時の私に何があれば勇気を持つことができたのだろうか。「一緒に考えてくれる大人がいたら」「背中を押してくれる大人がいたら」何かが変わっていたかもしれない。だから、私は子どもの可能性を信じて、子どもに寄り添い、村の抱える問題について一緒に話し合い、一緒に活動してくれる大人に自分からなろうと思う。

私が考える地域共生社会の実現に向けた活動は、「村おこし子ども団」である。やることは、当時の私の視点でやりたいと思う活動だ。

まずは、公募でボランティア活動をしたい村の子どもたちを募集する。そこで、希望のあった子どもたちを村おこし子ども団として、大人のサポートを受けながら、村で困っていることの中から自分たちができるボランティア活動をできる範囲で実行していく。

ポイントは、大きく 3 つある。

1 つ目は、「自主性・自発性」を大切にすること。強制的に集めるやり方では、ボランティアの醍醐味である、「自らすすんでやること」を損ねてしまうので、募集の際は人数を集めることを目的とするのではなく、本人の自己選択で行えるように配慮したいと考えている。

2 つ目は、「自分たちができる範囲で無理なく活動を行う」ということだ。ボランティア活動は、開始することよりも持続することが難しく、持続しなければ真に活動の意味を実感することは難しい。そのため、素晴らしい活動であっても、活動者の負担が大きく持続できない活動ではなく、無理なく持続できる地域の文化となるような活動を目指したいと考えた。

そして、3 つ目は、大人の関わりはあくまでサポートであり、基本的には子どもたちの中で活動を考えられるような環境をつくることだ。私たちの地域には、子どもは未熟であり、大人が考えたことに子どもたちが従うという一方通行な社会構造がある。

確かに子どもたちは人生経験が不足していて、活動の中で迷ったり誤ったりすることも予測される。だが、かならずしも人生経験の長い大人が考えたことが全てうまくいっている訳でもない。

むしろ、答えのない課題については、子どもたちがの方が、前例や既成概念にとらわれない創造性豊かな発想や工夫を思いつくかもしれない。それに、失敗したとしてもその失敗から学んでいくことは、子どもたちの将来にとってプラスの経験になるだろう。

せっかく子どもたちが自由な意志と社会貢献から選んだボランティア活動なのであれば、失敗をしないことではなく、失敗から学ぶ経験をしてほしい。ある意味、失敗上等。大人が仕切りすぎることなく、子どもたちが輝ける名脇役や縁の下力持ちとしての役割を大人たちには期待したい。

既に大人が筋書きをかいたボランティア活動は村の中にある。特に多いのが清掃活動だ。たしかに素晴らしい活動である。一方で「ボランティア活動は清掃活動のこと」だと考えていたり、「ボランティア活動は強制的に参加せざるをえない活動」と捉えている子どもがいたりするのも事実だ。

村おこし子ども団は、やること自体は単純なように見えるが、幼いころの私がやりたかった活動だ。今の子どもたちの中にも興味がある子がいる気がしている。

この活動は、「ゼロから子どもたちを中心に大人がサポートしながら活動を始めていく」そのプロセスこそが非常に重要だと考えている。

村おこし子ども団は、ボランティア活動という村の子どもたちの新しい選択肢だ。社会に貢献したいと思う気持ちを表現するための環境が、求めている子に届くことを願っている。